

自分の顔を食べさせて、飢えている人を救い、まん丸顔の愛くるしいキャラクターで、子どもたちの心を惹きつけてやまない「アンパンマン」。その作者であるやなせたかしさんは、ご自身の戦争体験から、戦いにおける正義に疑問を感じたという。そうしてたどり着いた本当の正義が、ひもじい人を助けるかっこ悪いヒーローだった。アンパンマンを通して表現し続けるやなせたかしの正義への思いについておうかがいしました。



正義の味方、 アンパンマンから学ぶ 支えあう心

漫画家

やなせたかしさん

Takashi Yanase

立場が変われば、正義も変わる 人間の信念なんて、心もとない

正義とは信じ難いもの。そう思ったのは、第二次世界大戦で敗戦したときです。僕らは、「アジアの民族を救わなくちゃいけない。これは正義の戦いなんだ」と言い聞かされ、それを信じて戦地に赴いたんです。ところが、戦争が終わってみると、それは正義なんかじゃなくて、日本は悪いことばかりやっていたということになっている。中国の教科書にもそう書かれてあるわけですよ。逆にもし日本が勝っていたら、中国やソ連、アメリカが悪いということになっていたはず。そう思ったとき、立場が変われば、正義は逆転するものだということが分かったのです。

現在も各地で紛争が起こっていますが、戦っているそれぞれの側に正義がある。そして言えることは、それは常に勝者の側にあるわけです。そんなものが正義なんて、とても信じ難い。

僕がアンパンマンを描きはじめたころは、ウルトラマンや仮面ライダーといったスーパーマンが、正義の味方として子どもたちに非常に人気がありました。でも怪獣を倒すことが正義かという、それはある強国を倒すのと同じことで、怪獣の側から見ればスーパーマンのほうが悪者なわけです。しかも彼らは怪獣をやっつけて、ただ喜ぶだけで、

そのあとのアフターケアは何もやらない。戦いでビルは倒壊し、電線は切れ、辺りは焼け野原となり、いろいろと大きな被害が発生しているにもかかわらず一切弁償しない。放っておいたんです。戦後処理を何もしないで、正義の味方というのはおかしいですね。

そこで、本当の正義とは一体何なのかと考え、出てきた答えが、飢えている人に自分の顔を

ちぎってあげるアンパンマンだったのです。人間の生活の中で一番苦痛なことは食べられないこと、次に住居、衣服、そしてお金という順番になります。その中で、だれにでもできる一番簡単な人助けは、ひもじい人がいればそれを助けてあげることではないか、と。アンパンはファーストフードですから、それが空を飛んで行って、飢えている人に



食べさせてあげれば、ひとまず餓死せずに済む。そういうスーパーマンのほうが正しいと思い、とにかくそんな絵本を描いてみようと思いました。ただ、アンパンマンは見た目もカッコよくないし、怪獣と戦ったりもしないので、子どもにはウケないだろうと思っていました。

アンパンマンが顔を食べさせるのは、 正義は自分が傷つくことの置き換え

アンパンマンを描き始める前、僕は4コマとか1コマの、大人向けの漫画を主に描いていました。そのころ、漫画はまだ大人の読み物でしたが、手塚治虫の出現によって、子どもを対象とした劇画ブームが起こり、漫画の世界が大きく変化しました。これを機に、僕も子ども向けの絵本を描くようになったのです。とはいってもそれはアンパンマンとは違い、賞をいただいた「やさしいライオン」をはじめ、メルヘンチックな内容のものでした。そのため当初、アンパンマンは出版社の担当者には不評で、「アンパンが空を飛んでいるような話はあなたの本質に合わないので、やめたほうがいい」と言われたほどです。

もともとアンパンマンは、自分の顔を食べさせて、飢えている人を助けるというお話です。顔を食べさせることについては、あとになって自分でもエーッと思いましたが、はじめはパンだからそれを食べさせるのは当然だと思っていました。ただそこには、正義を行うと自分も深く傷つくという考えが根底にありました。たとえば最近起こったように、駅のホームから転落した人を助けようとして自分も犠牲になってしまうとか、強盗を捕まえようとして追いかけて、逆に刺殺されるということだってあります。正義とは大きなリスクを伴うもので、捨身、献身の心なくしては行えません。

つまり、行為そのものは称賛されるべきことであっても、



やなせ たかし

大正8年2月，高知県生まれ。東京高等工芸学校（現千葉大）図案科卒。兵隊から帰り1年間，高知新聞に勤め上京。昭和22年から6年間、三越宣伝部に勤務し28年，漫画家として独立。詩，シナリオ，童話などにも多才ぶりを発揮した。わが国初の本格アニメミュージカル「ちいさなジャンボ」を手がけたほか、「アンパンマン」は絵本，ビデオ，劇場映画，テレビアニメなども展開。責任編集している大人向けの月刊誌「詩とメルヘン」は今年で27年目になる。「ボオ氏」で週刊朝日漫画賞，「やさしいライオン」で毎日映画賞優秀童画賞，「アンパンマン」で日本アニメ協会アトム賞受賞。日本漫画家協会常務理事。

その姿は決してカッコいいものではないのです。だから，最初のころのアンパンマンは，つぎはぎだらけのマントをはおっていて，意識的にかっこ悪く描いていました。

また自分の顔を食べさせた後，アンパンマンの顔がすっかりなくなってしまおうんですが，そうした理由は，もともと僕が透明人間が好きだったからです。全身が透明になってしまったら全然面白くないけど，ちゃんと服を着ているのに首から上が見えないという構図がとても好きで，以前から一度描いてみたいと思っていました（笑）。これは毎回やると話が同じになって，つまらなくなってしまうので，最近ではいつもというわけではありませんが，もちろん今でもやっていますよ。何といっても，これはアンパンマンの特技ですからね。

人類が幸せになるには， まず，この世から飢餓をなくす

当初，このお話にバイキンマンは存在しませんでした。登場のきっかけは，僕がアンパンマンの絵本を描いたときに，作曲家のいずみたく氏が「これをミュージカルにしよう」と言い出したことです。それでやってみたんですが，どうもドラマに締まりがない。観客はおもしろがることはおもしろがるんだけど，何かが足りなかった。その原因を考えたところ，敵役がいけないということに気が付いたんです。それでアンパンマンの敵，つまり食品の敵だから，その象徴として試しにバイキンマンを出してみたところ，途端におもしろくなった。これはどういうことかというところ，絵を描くときに光と陰があるように，正義に対して悪を登場させることで，アンパンマンがとても生きてきた。そこからストーリーが作りやすくなりましたね。

バイキンマンはいつも散々にやっつけられるけど，また平気な顔をして出てくる。これは人間の世界でも言えることで，私たちが風邪をひいて，治ったらもう二度とひかな

いかというと，そうではない。また別の病気になってかかる。逆に無菌状態にしまうと，免疫がなくなってしまい，人間も死んでしまいます。

要するにバイキンとのバランスを保ちながら人間は生きているわけで，一種の「必要悪」なんです。また，すべての菌が悪者かというところ，ビフィズス菌のように，人間にとって有益な菌だっています。バイキンマンはそれらの総合体だから，必ずしも悪いわけではなく，いい部分もある。いずれにしても，バイキンマンが存在しないとアンパンマンも存在しない。そういう形ができたから，このお話がおもしろくなったのだと思います。

アンパンマンがこの世に登場してすでに30年強になります。はじめ，アンパンマンは大人向けの童話としてつくりました。そのときは，ウルトラマンなどのスーパーマンを意識していたので，体形も大人に近いものでした。それが幼稚園などで人気者となり，次第に子どもたちの体形に近い三頭身に。これは自分が意識して変えたというよりも，対象が幼児に移ったことから，いつの間にかそうなったというほうが正しいかもしれません。ただ，なぜ幼児に受けたのかは自分でもわかりません。それがわかれば，だれにでもすぐに人気キャラクターをつくれるわけですよ。

このお話を通じて僕が言いたかったことは，戦争というのは，ある側の人間の言い分であって，本当の正義ではない。人類が幸せになるには，まず飢餓をなくすということです。日本は食べ物があるほど豊かですが，飢餓に苦しんでいる人は世界中にたくさんいます。いつかそれをなくすことができたら。そのときに，アンパンマンの仕事が終わるときかもしれませんね。



特集

ボランティアってなんだろう？

2001年は ボランティア 国際年

21世紀の幕開けとなる今年は、
「ボランティア国際年」。
1995年の阪神・淡路大震災以来、
日本でもボランティア活動や
市民運動の輪が広がっています。
しかし、ボランティアという言葉が
正確に言い表す日本語がないため、
「ボランティア=自発的な無償行為」といった
概念だけが一人歩きしている面もあります。
ボランティアってなんでしょう。
その答えと一緒に
探してみませんか。



ボランティア国際年

[IYV = International Year of
V o l u n t e e r s]

1997年、国際連合総会において、日本が提案した「2001年をボランティア国際年（IYV）とする」ことが満場一致で採択されました。IYVには、「ボランティアに対する理解を深める」「ボランティアへの参加が促進される環境を整備する」「ボランティアのネットワークを広げる」「ボランティア活動を推進する」という4つの目的があり、日本は提唱国として、国際社会からリーダーシップを期待されています。

International Year of Volunteers 2001



ボランティアは無償?

「ボランティアみたいな立派なこと、自分には無理」
そんな声を聞くことがあります。なぜ、立派なことだと思ふのかをたずねると、多くの場合、「無償だから」という言葉が返ってきます。しかし、実際にボランティア活動をしている人は、「ボランティアをして、たくさんのお金を『もらった』」と話します。

何をもらうのか。それは、相手を受け入れ、理解する「力」であり、自分の気持ちを表現し、思いやりを実行する「力」です。

「専門的にはそれらを援助効果と言います。つまり、ボランティアとは俗にいう『なさは人のためならず』なんです」と、明快に答えてくださったのは、立命館大学産業社会学部助教授の中村正先生。お金が介在しないという点では無償。でも 受ける利益はきちんとあるというわけです。



ボランティアの生まれるところに、人権問題あり

いま、京都市内には約800のボランティアグループがあると言われます。

障害のある人や高齢者など個人や家庭への生活支援、キャンプなどの青少年活動、平和や人権と取り組む国際交流、施設や病院でのお手伝い、地域活動、社会参加、環境保護運動など、その分野は多種多様です。

「ただ、ボランティアがどういうところに発生するかを見ていくと、そこには共通して人権問題が見えてきます」と中村先生。

こんな例があります。

目の不自由な人のために、友人たちが点訳ボランティアのグループをつくりました。しかし、日が経つにつれて当事者以外からどんどん仕事が入るようになります。新しい福祉制度をつくったので、その広報を点字で伝えたいとい



する側、される側

う役所からの依頼。入試問題を点訳してほしいという大学。障害者向けの製品をつくったので、取り扱い説明書を点訳してほしいというメーカーなど...

この事例は、中村先生が責任編集された『京都発NPO最前線』(京都新聞社刊)からの引用ですが、いずれの場合も行政なり、大学なり、メーカーなりが責任をもってすべき「情報保障(きちんと情報を伝える作業)を果たせていないことから生じた事態です。

「ボランティアは社会がやるべきことを肩代わりするものではありません。必要なことを公的サービスに転化しよう主張していくのもその役割。ボランティアは必要なのではなく、人間が社会生活をしていく上で、必然的に生まれるものです」と中村先生。

ボランティアは、アドボカシー(権利擁護)の最先端でもあるのです。

ボランティア活動を語る時、「する側」「される(受ける)側」という言葉がよく使われます。そのイメージは、「される側=弱者」でしょう。しかし、障害の有無にかかわらず、ボランティア活動の場での人と人との出会いはあくまで対等です。

嫌なことがあれば、受けている方も遠慮なく『いや』と言えばいいし、ボランティアも自分の感情を抑えて嫌々サポートする必要はない...「普通に接すればいいんです」と中村先生。

「ボランティア活動にいま期待されているのは、単なるサポートではなく、社会で困っている人たちの最前線のニーズを把握し、それをアドボカシーの立場から社会全体の認識となるよう情報化していくことです」

つまり、ボランティアに限らず、人はみな対等であるという認識があれば、互いに何をすべきか、すべきではないか、そのあたりの行動が個人でも団体でも行政でもはっきり見えてくると先生は話されます。



ボランティアを始めるために

では、ボランティア活動に参加したいと思ったとき、どこからその一歩を踏み出せばいいのでしょうか。「ボランティアをすること」は、決して難しいことではありません。

「当センターか、各区の社会福祉協議会のボランティアセンターに、おたずねください」というのは、京都市ボランティア情報センターの志藤修史主事。

家事ができる、歌が好き、エンジニアだったのでパソコンが使えるといった、具体的な『何か』をイメージしている人のほうがボランティアをしても長く続くとか。ちなみに、いちばん困るのは、「単にボランティアをしたい」という人だそうです。

ボランティア活動は、人と人との出会い。する側・される側という二分化された関係ではなく、共に学び、教え合う場。

車イスを押すことではなく、車イスに乗っている人の気持ちに、よりそおうとする思いがあれば、力の弱い子どもでも高齢者でも、障害のある人自身にもできることです。

「いまのボランティアの主力は熟年女性ですが、ニーズが多様化する中、今後のボランティア活動にはコーディネート能力をもった人材が必要になっています。その意味で、若い人たちや男性など幅広い世代に期待しているんです」と志藤さん。

できることからボランティア、あなたも始めてみませんか。

ボランティア活動についての問い合わせは

京都市ボランティア情報センター

〒610-1101 京都市西京区大枝北沓掛町1丁目-3-1
洛西ふれあいの里保養研修センター内

電話 / 075-335-2215

FAX / 075-333-4664

開館日 / 月～金、午前9時～午後5時(土・日休館)

URL / <http://www.mediawars.ne.jp/fukusi/>

E-mail / vc57000@wm.shakyo.wamnet.wam.go.jp

食事づくりや料理の配達を通して、高齢者の生きがいづくりを支えていこうというのが「配食ボランティア」。今回は、左京区の葵地区で配食ボランティアを中心としたさまざまな高齢者福祉に取り組んでいる筋（あざみ）祥子さんに、地域社会のあるべき姿とは何かを伺いました。



社会の高齢化が進み、私たちのまわりでも独り暮らしや、寝たきりの方が増えています。そこで、みなさんと一緒にわいわいと料理でも作りませんかと結成されたのが、「食事づくりを楽しむ会 - ひまわり -」です。毎月第3土曜日の午後、左京区にある葵小学校の家庭科室を借りて、地域の高齢者とともにお弁当づくりを楽しんでいます。



ません。そういう場合は、スタッフや地域の方が手分けしてお弁当の宅配サービスも行っていきます。

「やはりお寂しいんでしょうね。」

「高齢者のみなさんは、これまでの知識や経験を生かしたいと思っておられるんです。私たちはそのきっかけづくりをするサポーター役なんですよ」と話すのは、グループを支える中心メンバーの一人、筋祥子さん。民生児童委員として25年間、地域の福祉活動に携わってきましたが、周囲に頼れる人がいなくて不安を抱えている高齢者があまりに多いことを知り、何か役に立てないかと思うようになったとか。行動派の筋さんは早速、仲間と共に他の地域の配食ボランティアに参加し、高齢者の生きがいづくりや在宅福祉サービスのあり方について約1年間しっかりと勉強したそうです。

お弁当を持っていくと、『よう来てくれた』と大歓迎をさせていただきます。いろんなボランティアがありますが、もっと高齢者の話に耳を傾ける機会を持つことも大切ではないでしょうか。前日に元気に会話を交わした方が、次の日に訪ねたときには亡くなっていたことも。「体調の変化を見抜けなかった...」という後悔と同時に、「亡くなったことに早く気づくことができよかった」という思いもあったとか。高齢者の孤独死が社会的な問題となっていますが、そうした悲劇を防ぐためには、一人ひとりが相互扶助の意識を高め、隣近所に気を配ってあげなければならないと筋さんは話します。

「食事を受け取るときのみなさんの笑顔は輝いていました。顔の見える関係って大切だと痛切に感じましたね」。このときの筋さんたちの貴重な経験が、現在のひまわりの活動精神に生かされているといいます。

現在、葵学区で独り暮らしをされている高齢者の数は250名以上。寝たきりの方は50名にものぼります。筋さんはこうした人たちが生きがいを持てるような地域福祉のあり方を模索しているといいます。

「ひまわりの主役はあくまでも参加者のみなさん。包丁さばきの得意な人もあれば、食器を洗う人、料理を並べる人がいたりして、



私たちが教えられることも多いんですよ」。一品一品が高齢者の健康に配慮されたメニューは、スタッフが月替わりで考えたもの。5月なら鰯の黄味焼きとシントウの付け合わせ、7月は素麺やちらし寿司など、栄養価も高く季節感があるとみなさんに好評です。平成10年にはこれまでの献立をまとめた小冊子「ひまわりレシピ」を発行し、高齢者だけでなく独り暮らしの男性などにも喜ばれました。

「私たちの活動は月に1回なので、できる範囲も限られています。例えば、いろんなボランティアグループがお互いに協力しながら地域を支える仕組みがつかないでしょうか」。こうした呼びかけにより、平成11年には京都市内外で配食ボランティア活動を行う9グループの連絡会が発足しました。これまでにさまざまなシンポジウムや研修会が開催されるなど、「食」を通じて高齢者を支える活動は確実に広がりをを見せています。

「将来は、地域の高齢者の声をまとめた自分史を編集したい。きっと話したいことは山ほどお持ちでしょうから」。身近な地域社会の中で高齢者との共生を目指す筋さん。しばらくは休む暇もなく、大忙しの日々が続きそうです。

ひまわりの活動は、「自分たちが作った料理を自分たちで食べる」ことを基本にしていますが、中には身体が不自由なため会場まで来られない人も少なくあり

お問い合わせ先
京都配食ボランティアグループ連絡会
京都市ボランティア情報センター 気付
TEL(075)335-2215 FAX(075)333-4664

ドメスティック・バイオレンス（略してDVともいわれています。）とは、夫や恋人など身近な男性から女性に対して加えられる様々な形態の暴力のことです。1993年に国連総会で採択された「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」や1995年に開催された第4回世界女性会議（北京会議）以降、社会的な問題として取り上げられるようになりました。

今号のワード

ドメスティック・バイオレンス

こんな行為はドメスティック・バイオレンスです

ドメスティック・バイオレンスには身体的暴力以外にもさまざまな種類があります。怒鳴る 無視する 子どもを危険な目にあわせるなど女性の生き方を制約したり人格を傷つける行為はすべて暴力と考えられます。

●暴力の種類●

身体的暴力

殴る。蹴る。
物を投げつける。

精神的暴力

「おまえはバカだ」「食わせてやっている」などと暴言を繰り返す。無視する。人間性を否定する。人格を過小評価する。

社会的暴力

親・きょうだい友人 近所の人などとのつきあいをさせない。外出の制限をする。

経済的暴力

生活費を渡さない。仕事につかせない。健康保険証を渡さない。

子どもを巻き添えにした暴力

子どもの目の前で暴力を振るう。子どもに対して暴力を振るう。

性的暴力

性的行為を強要する。避妊に協力しない。中絶を強要する。

ドメスティック・バイオレンスについて あなたも考えてください。

ドメスティック・バイオレンスは特別な問題なのでしょうか。いいえ、決してそうではありません。京都市が平成11年に行った女性への暴力に関する意識調査の中で、回答を寄せた女性のうちおよそ3割が、何らかの形態の暴力を受けているという結果が出ました。

このドメスティック・バイオレンスは、家庭内の個人的な問題ではなく、身体的、経済的な力関係において相対的に優位に立つ夫（パートナー）の性差別意識・支配意識の表れと言われており、女性を従属的な地位に追い込む社会構造的な問題です。

ドメスティック・バイオレンスの解決には、お互いに人間として、パートナーとして相手を尊重することが必要です。

これらの種類の暴力が1つ又はいくつも繰り返して行われます

もしもあなたやあなたの親しい人が暴力を受けたとしたら…。最も重要なことは「悪いのはあなたではなく暴力をふるう男性である」ということ。暴力を受けていることを恥ずかしがったり自分を責める必要はまったくありません。まずはあなた自身と子どもの安全を考えて行動してください。専門家や行政などの窓口相談してみるのも一つの方法です。

相談窓口

京都市女性総合センター(ウィングス京都) 京都府婦人相談所

住所 / 京都市中京区東洞院通六角下る 075-441-7590
御射山町262 電話相談 / 月～金曜日

相談専門電話 / 075-212-7830 9:00～16:30

相談時間 / 11:00～12:30 13:30～18:30 来所相談 / 月～金曜日
9:00～16:00

(水・日曜日を除く) 受付は18:00まで

面接相談 / (予約制)

11:00～12:30 13:30～18:30

(水・日曜日を除く)

必要であれば法律相談・労働相談・

女性への暴力相談(予約制)

・法律相談 / 第1・第3金曜日

13:30～16:00

・労働相談 / 毎火曜日

13:30～17:00

・女性への暴力相談 / 毎月曜日

13:30～16:30

京都府警総合相談室

075-414-0110

電話相談 / 月～金曜日

9:00～17:45

女性の人権ホットライン

(京都地方検察局人権擁護課)

075-231-2014

電話相談 / 月～金曜日

8:30～17:00

いずれも祝日を除く



資料館を訪ねて同和問題について考えてみませんか!

京都には、人権にゆかりのある建物や施設が数多く残されています。今回は、同和地区の歴史や生活を伝える「ツラッティ千本」と「柳原銀行記念資料館」を紹介。同和問題を通じて人権について考えるきっかけづくりにしてください。

手づくりの資料館。つらって見学に来ておくれやす

ツラッティ千本

【京都市楽只隣保館資料室】

北区の千本地域は、明治政府に身分取立嘆願書を提出した益井元右衛門をはじめ、全国水平社の初代委員長に選ばれた南梅吉など、差別撤廃と住民の生活向上に尽力した先人たちにゆかりの深い地域です。「ツラッティ千本」は、彼らの取組を次世代に伝えるとともに、同和問題や在日韓国・朝鮮人、障害者問題など、さまざまな人権問題について市民のみなさんに考えてもらおうと、1994年に設立された資料館です。「ツラッティ」の語源は、「つらって」という京都の方言で



「一緒に連れだって」来てくださいという意味が込められています。

展示室はテーマ別に5つに分かれており地域の「昔と今」

を比較した町並み写真や歴史年表、洛中洛外図高津本(複製)、部落解放研究北区集会の取組の経過と広がりなど、多様な資料が展示されています。地域の人たちの手づくりや寄贈によるものもあります。たとえば、地域に住む高齢者からの聞き取りをもとに、小学生の子どもたちがつくった八軒長屋の模型は、昔の暮らしを素朴な手作りで再現した、印象深い展示品です。そのほか、2つの研修室も併設され、来館者への研修(要予約・無料)なども行われています。

地域の人たちの協力も得ながら運営されている「ツラッティ千本」。春休みや夏休みなどには自由研究に訪れる小中学生も大勢います。さあ、みなさんもつらって(連れだって)見学に出かけてみませんか。

ツラッティ千本(京都市楽只隣保館資料室)

住所 / 北区紫野花ノ坊町23-1

電話・FAX / 075-493-4539

開室時間 / 午前10時～午後4時30分

閉室日 / 第2・第4土曜日, 日曜日, 祝休日, 年末年始

明治時代の銀行が人権資料館に

柳原銀行記念資料館

【京都市崇仁隣保館資料室】

柳原銀行は、部落差別をうけてきた人たちによってつくられ、同和地区の改善のために運営された唯一の銀行です。柳原町(現崇仁地区)の町長だった明石民蔵ら地域の人たちによって、明治32年に設立され、昭和2年に閉店されるまで、地域の金融機関として、地元産業の振興や教育の向上に貢献しました。

京都市では、柳原銀行を移築・復元・保存し、地域の人たちによって平成9年に柳原銀行記念資料館(京都市崇仁隣保館資料室)として生まれかわりました。同和地区の歴史や文化、生活の様子を伝える貴重な資料が分かりやすく展示され、市民のみなさんが同和問題を正しく理解する中で、人権の尊重について学習する啓発施設となっています。



館内に一歩足を踏み入れると、木造の格天井や重厚感のあるシャンデリア、細かな透かし装飾など、格調の高い落ち着いた雰囲気が広がります。当建築物は明治40年に建てられたものと推定されており、京都に現存する木造の銀行建築物として

は、最古のものです。平成6年には京都市登録有形文化財にも指定されました。京都駅から徒歩8分で、市外からも多くの人が訪れています。

明治期の香りを今なおとどめる「柳原銀行記念資料館」で、人権の大切さについて考えてみませんか。

柳原銀行記念資料館(京都市崇仁隣保館資料室)

住所 / 下京区下之町6-3

電話 / 075-371-8220 FAX / 075-371-7708

開館時間 / 午前10時～午後5時

休館日 / 第2・第4土曜日, 日曜日, 祝休日, 年末年始

編集後記 21世紀の幕開けの今年、国連が定めたボランティア国際年です。ボランティアのやり方もいろいろあること、そして、人はみんな世の中からそれぞれの立場で「必要とされる人」なのだということ。あまり難しく考えず、自分のできることで、他者のために役立つことをさりげなく実行に移したいと思います。映画「ベイ・フォワード」のように、こうした運動の輪が広がりますように。(M)
本誌に対するご意見、ご感想を右記までお寄せください。この情報誌は、年3回(5月, 8月, 12月,)発行します。

ひと・まち・ロマン  元気都市・京都

発行日 平成13年5月1日

発行 京都市文化市民局人権文化推進部人権文化推進課
〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る

☎075(222)3381

京都市印刷物第130089号

この情報誌は、区役所・支所の地域振興課、市役所の市政案内所ほかで配布しています。郵送をご希望の方は、返信用切手(140円分)を同封のうえ、京都市人権文化推進課までお申し込みください。